

令和元年度 大阪府中学生チャレンジテスト

結果と分析（東大阪市）

令和元年6月19日（水）に実施された「大阪府中学生チャレンジテスト（3年生）」について、東大阪市の結果及び分析を公表します。

●調査結果について●

本調査で得られる結果は学力の特定の一部であることや、平均正答率のみでは生徒の学力については測ることができないことを踏まえ、本調査から得られたデータをもとに学校・家庭・地域が学力に関する課題を共有し、さらなる連携を深め、生徒の学力向上に取り組むことを目的として分析を行った。

●調査目的● （大阪府教育委員会作成の実施要領より）

- ①大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒の課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- ②市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組みを通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- ③学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- ④生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

●調査概要●

実 施 日	令和元年6月19日（水）
実施対象学年	中学校3年生
実 施 教 科	中学校3年生：国語・数学・英語・理科・社会
調査実施生徒数	中学校3年生 国語：3530人 数学：3527人 英語：3525人 理科：3538人 社会：3535人

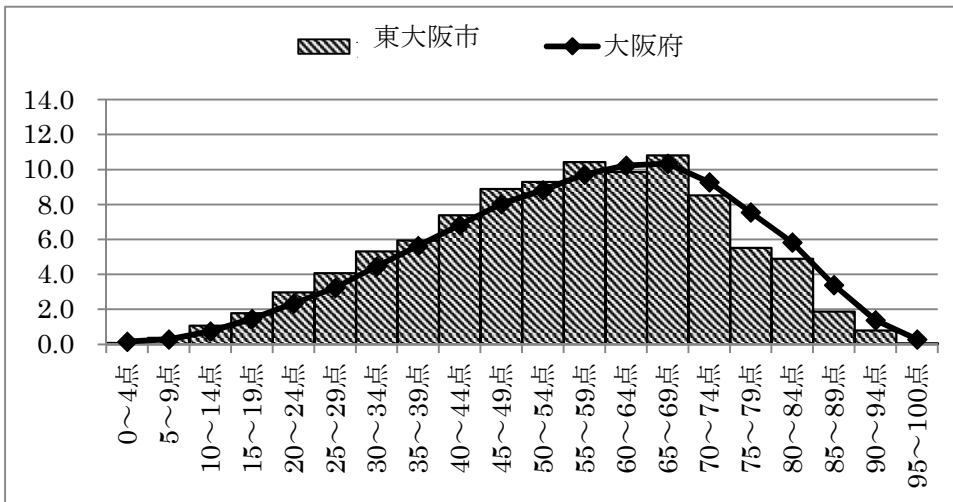
第3学年 国語

■平均得点

54.4 点（東大阪市）

57.1 点（大阪府）

■得点別分布の割合

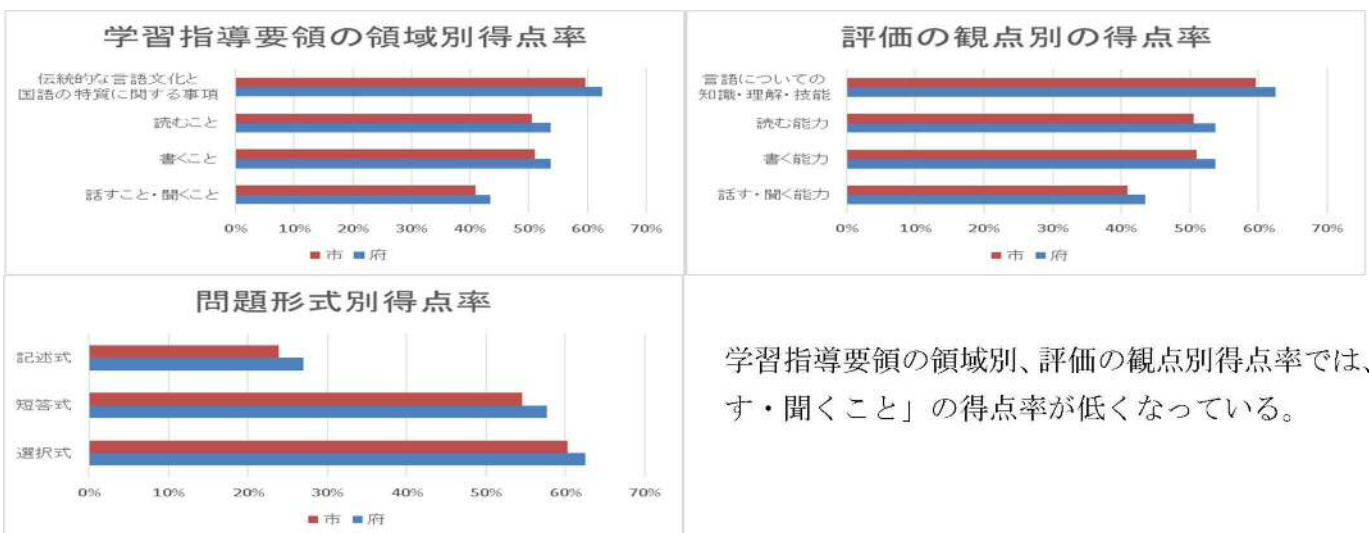


・大阪府の得点分布と比較的類似している。

・65～69 点をピークとする山型となっている。

・大阪府の分布に比べ、70 点以上の分布が少なく、20～59 点までの分布が多くなっている。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



学習指導要領の領域別、評価の観点別得点率では、「話す・聞くこと」の得点率が低くなっている。

■特徴的な傾向と対策

- ・文脈に即して漢字を正しく読む、正しく書く設問においては、「奮い（フルい）」（府との差 +0.8）、や「シヨクジュ（植樹）」（差 +1.3）といった府の平均正答率より上回っている設問もあるが、「伴奏（バンソウ）」（差 -7.7）、「ソった（沿った）」（差 -6.1）、「キントウ（均等）」（差 -4.2）という設問のように府の平均より大きく下回っている設問も見られた。これまでに引き続き、家庭学習や日々の授業での反復練習を充実させていくことで、言語に関する知識の中長期的な定着を図ることが必要と考えられる。
- ・目的に応じて複数の本を選ぶ設問の正答率は6.3%（大阪府7.1%）と最も低く、図書分類法である日本十進分類法についての理解ができていない。「主体的・対話的で深い学び」の1つとして調べ学習の充実が求められる中、検索方法など、生徒がより効果的に図書館を利用できるようにするための指導が求められる。
- ・記述式問題（全2問）の得点率が低い（23.9%）。一方で無答率は20.2%となっていることから、「書くこと」の中でも、「条件に従って書く」ことに課題が見られると考えられる。日々の授業の中で、「条件を提示して書く」という活動の機会を多く取り入れていくことが必要である。

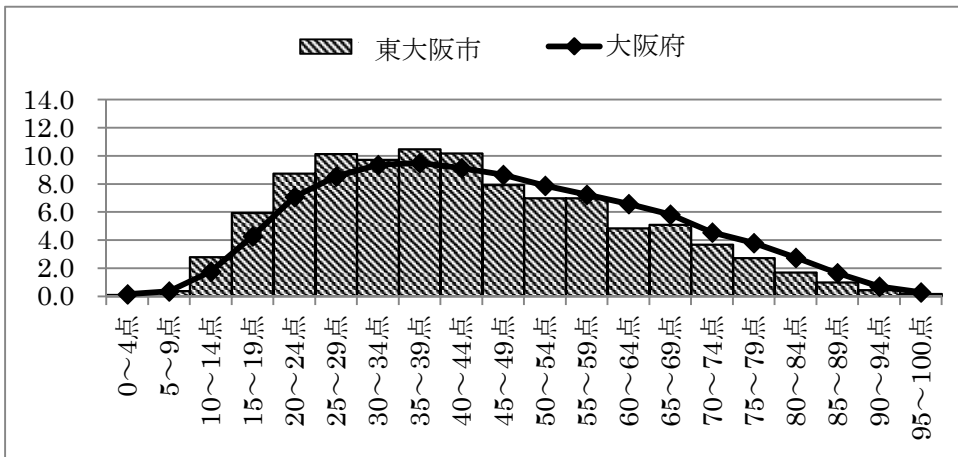
第3学年 社会

■平均得点

42.6 点（東大阪市）

46.2 点（大阪府）

■得点別分布の割合

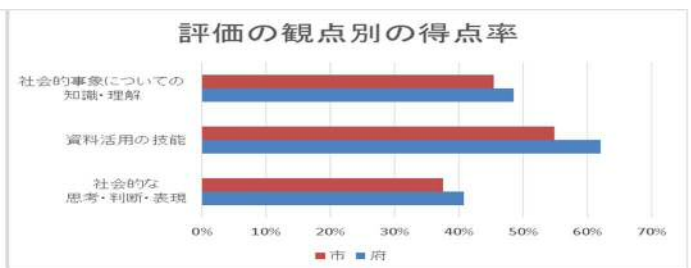
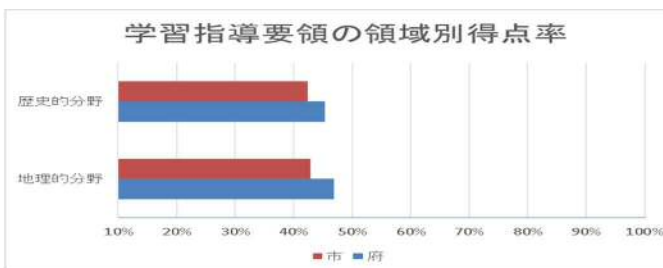


・大阪府の得点分布と比較的類似している。

・35～39点がピークとなるならかな山型となっている。

・大阪府の分布と比較して、45点以上の分布が少なく、10～44点の分布が多くなっている。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



評価の観点別の得点率では、「社会的な事象についての知識・理解」「資料活用・技能」に比べ、「社会的な思考・判断・表現」の得点率が低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・「地形図から読み取れる地形の名前を書く」設問（解答：扇状地）は、全設問中で大阪府との正答率の差が最も大きい（東大阪市 31.7%・大阪府 42.3%）。地形図の等高線を活用して地形を読み取る設問であり、資料活用・技能が必要となる設問である。正答率の差が10.5ポイントである一方、無答率の差は1.5ポイントと差は小さい。このことから、河川によって土砂が堆積することによってできるという共通点を持つ、扇状地と三角州の違いを十分に理解できていない可能性が考えられる。知識として学んだ後、数多くの地図を見ていくことで、中長期的な知識の定着を図る必要が求められる。
- ・記述式問題（全2問）の無答率が大きく、自分の考えを書くことに課題が見られる（2（3）②43.2%・4（4）47.7%）。社会的な思考・判断・表現についての理解を深めるために、複数の資料から必要な情報を読み取る学習活動の充実、そして、得た情報から導き出された考えをノートにまとめたり、授業内で発表したりするなど、表現活動の機会を多く取り入れていくことが必要とされる。

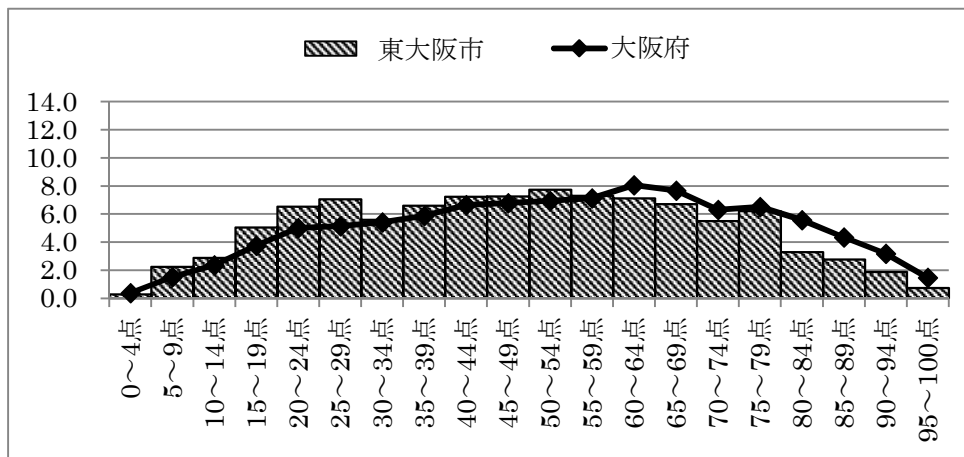
第3学年 数学

■平均得点

48.8 点（東大阪市）

53.5 点（大阪府）

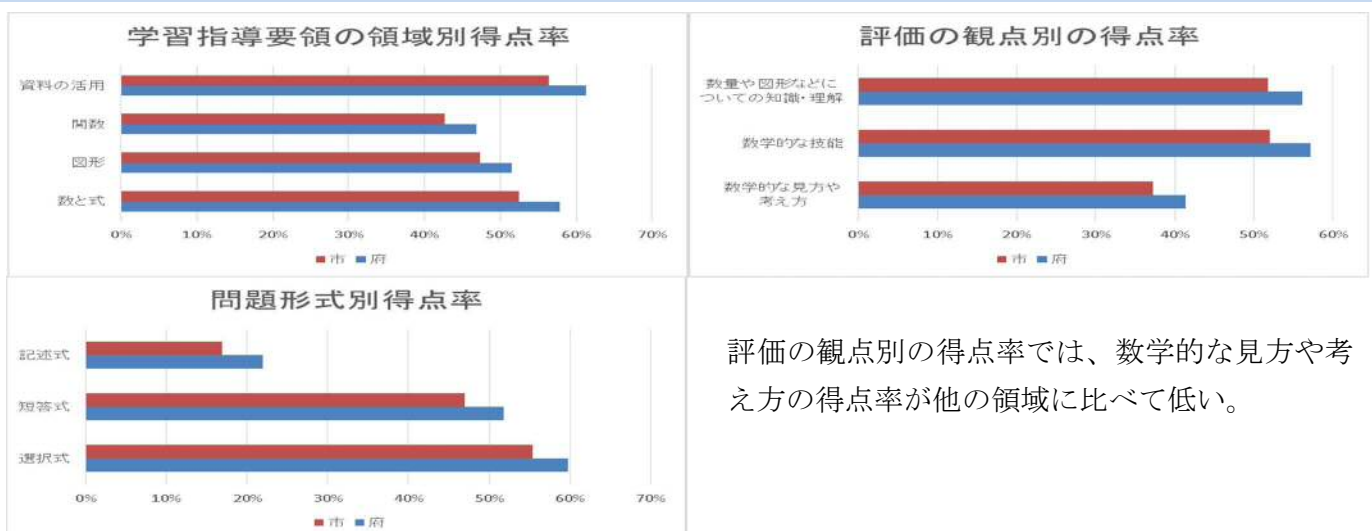
■得点別分布の割合



・大阪府の分布と比較して
29点以下の分布が多い。

・大阪府の分布と比較して
80点以上の分布が少ない。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



評価の観点別の得点率では、数学的な見方や考え方の得点率が他の領域に比べて低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・ 5（2）③「与えられた度数分布表について、ある階級の相対度数を求めることができる」かどうかを見取る設問は、全設問中、大阪府との開きが最も大きい（東大阪市 38.2%・大阪府 48.8%）。相対度数などの必要性和意味を理解するために、複数の資料から必要なデータを収集し、ヒストグラムを作成したり、相対度数などを求めたりしてデータの傾向を捉え、その結果を基に批判的に考察し判断するという一連の活動を経験することが重要である。
- ・ 6（2）説明「数学的な表現に導いた筋道について説明することができる」かどうかを見取る設問は全設問中、無回答率が最も高い（東大阪市 76.6%・大阪府 71.8%）。前段の、6（2）式「課題と会話の内容を読み取り、事象を数学的に表現することができる」かどうかを見取る設問でも無回答率が 55.6%と高く、数量の関係や法則などを簡潔、明瞭にしかも一般的に表現することに課題がある。日頃の授業から、文字を用いることのよさを実感し、数学的な表現を用いて自分の考えを「記述する」「発表する」機会を多く設け、それに対して評価することが大切である。

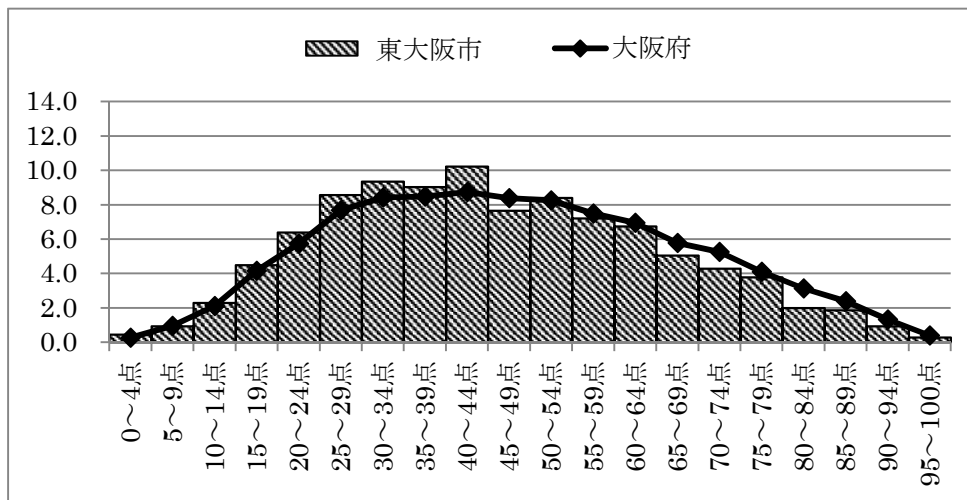
第3学年 理科

■平均得点

45.5 点（東大阪市）

47.7 点（大阪府）

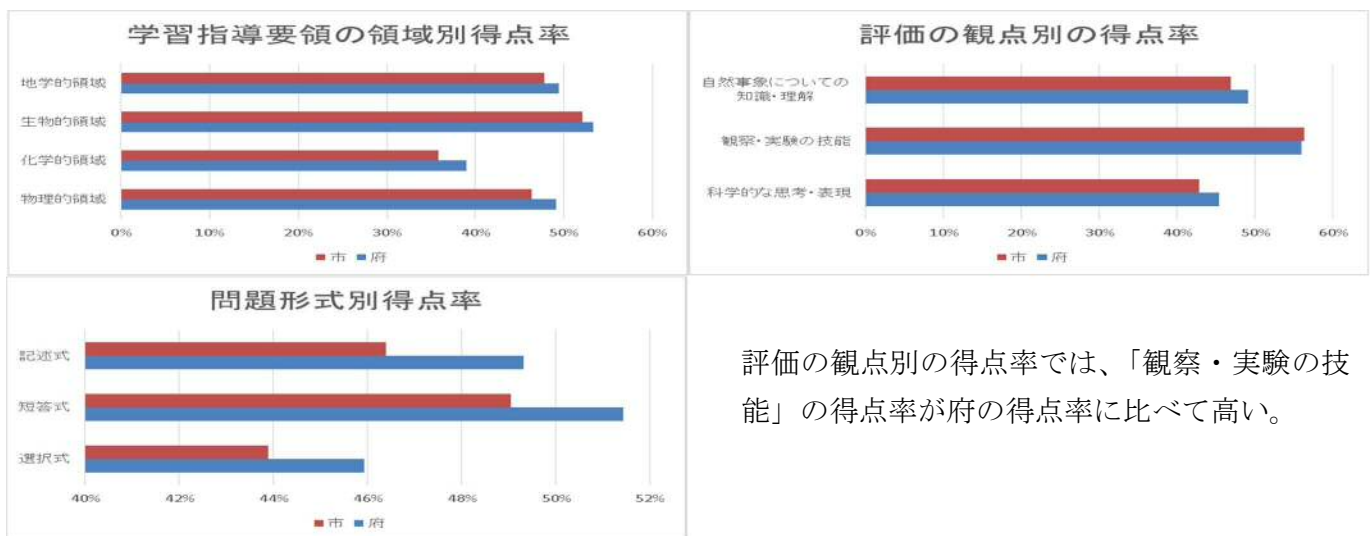
■得点別分布の割合



・40～44点をピークとする山型となっている。

・大阪府の分布と比較して、65点以上の分布が少ない。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



評価の観点別の得点率では、「観察・実験の技能」の得点率が府の得点率に比べて高い。

■特徴的な傾向と対策

- ・2（3）①「現在は形やはたらきが異なるが、起源が同じだと考えられる器官の名前を答える」設問（東大阪市 23.1%・大阪府 21.7%）、3（1）「液体を沸とうさせ、生じた気体を冷やし、再度液体にして集める方法の名前を答える」設問（東大阪市 27.5%・大阪府 25.4%）、5（4）「溶岩が地表や地表付近で短い時間で固まってできた岩石の名前を答える」設問（東大阪市 29.1%・大阪府 27.7%）の無答率が高い。基本的な語句の理解を問う設問であるので、授業においては、定着を図るために、反復練習を行いながら、理科用語の成り立ちを説明するなどの工夫が必要となっている。
- ・1（2）「イヌワラビとスギゴケに共通して当てはまる特徴を選ぶ」設問（東大阪市 15.1%・大阪府 16.5%）、7（2）「同じ音さから出した音の波形のグラフを選ぶ」設問（東大阪市 19.4%・大阪府 22.8%）の正答率が低い。授業においては、理科の見方・考え方を働かせ、自然の事物・現象に対して、観察、実験の結果を比較・分析し、解釈する学習活動が必要となっている。

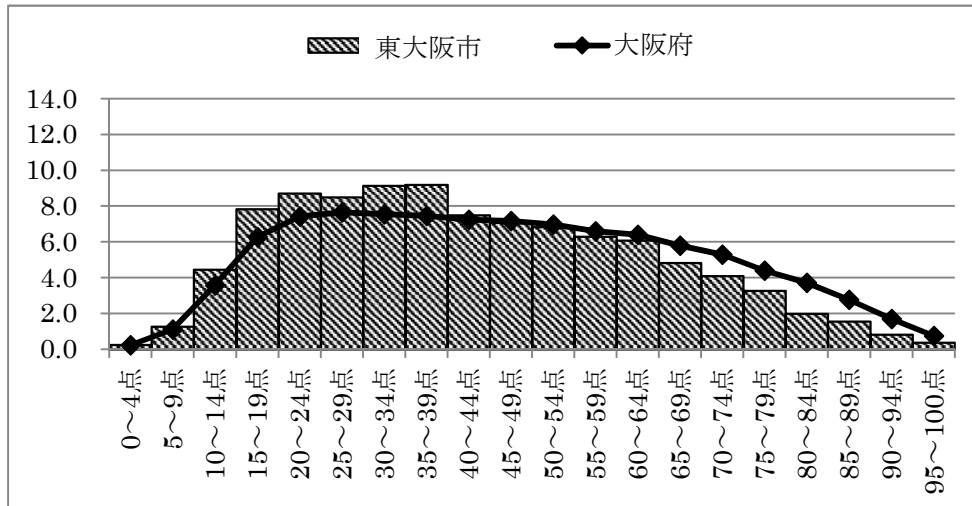
第3学年 英語

■平均得点

42.6 点 (東大阪市)

47.0 点 (大阪府)

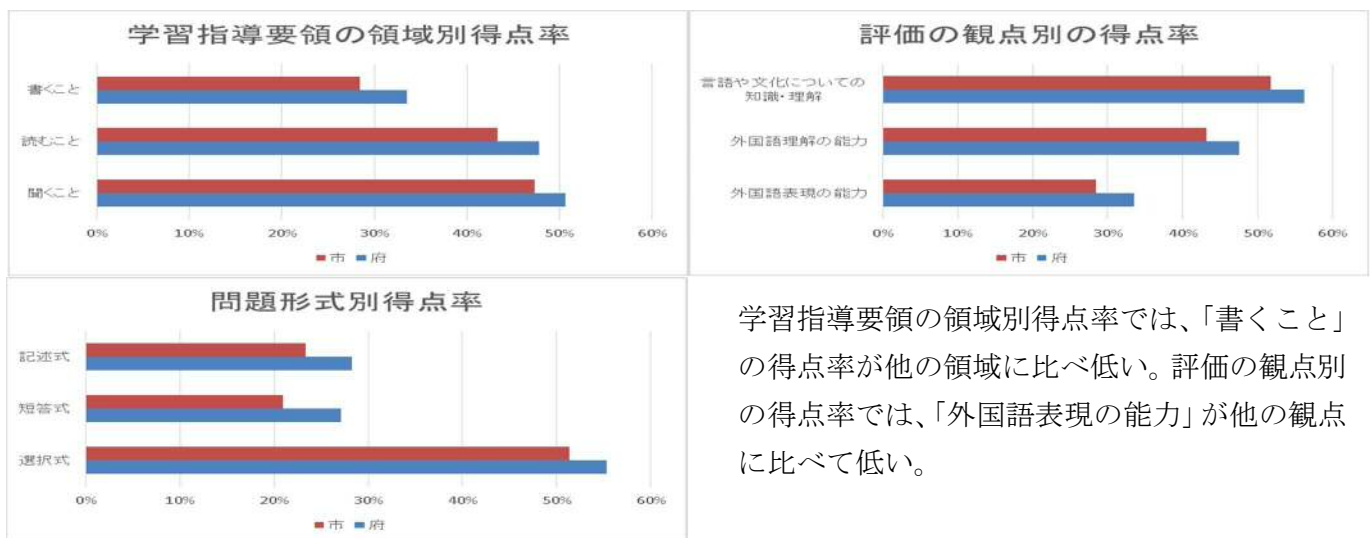
■得点別分布の割合



・39点以下の生徒の割合が、大阪府の割合と比較して多い。

・大阪府の分布と比較し、65点以上の分布が少ない。

■学習指導要領の領域別・評価の観点別・問題形式別の得点率



学習指導要領の領域別得点率では、「書くこと」の得点率が他の領域に比べ低い。評価の観点別の得点率では、「外国語表現の能力」が他の観点に比べて低い。

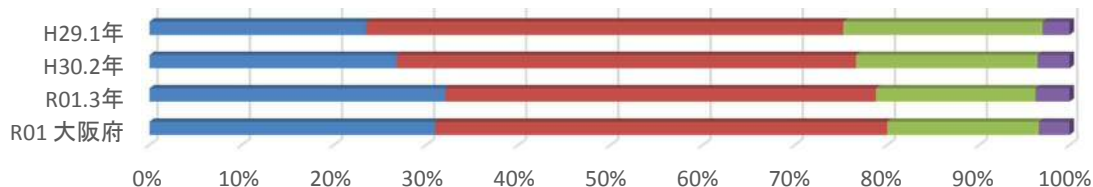
■特徴的な傾向と対策

- ・4(2)の適切な前置詞(between)を選ぶ問題において、大阪府との正答率の差が最も大きく(東大阪市 28.9%・大阪府 40.5%)、基本的な文の仕組みや対応している文の理解に課題がある。授業では、betweenという前置詞を場所や空間のときに扱うことが多いが、時間のときに扱うことが少ないため、慣れていないことも考えられる。チャンキング(意味・かたまり)で文を捉え、文構造を理解するより一層の指導が求められる。また、単語には様々な意味、形、使用方法があるので、対訳で単語を覚えることは避けたい。
 - ・9(1)の()内の語を適切に並び替えて、英文を完成させる問題において、大阪府との正答率の差が2番目に大きい(東大阪市 17.4%・大阪府 26.9%)。読む技能を測る設問だが、並び替え問題は、書く技能を間接的に図ることができるため、書く技能にも課題があると考えられる。
- 一見、動詞が2つ存在する文であるが、本動詞と不定詞を見極める必要がある。知識としての英語学習だけでなく、使いながら学ぶ。また、学びながら使うことも大切である。

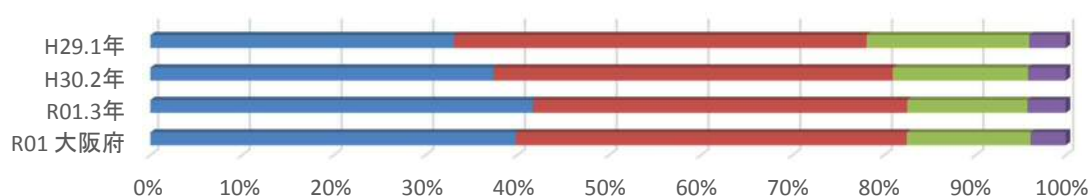
アンケート結果

■中学校3年生（同一集団の1年時からの変化）

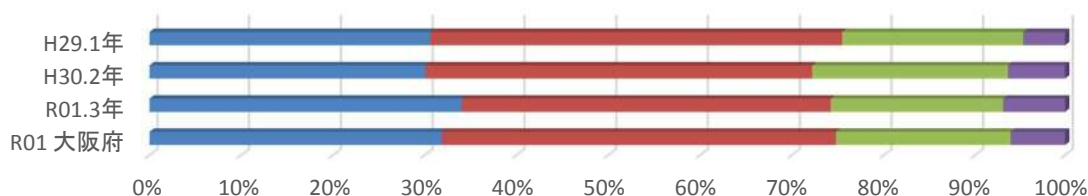
国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている。



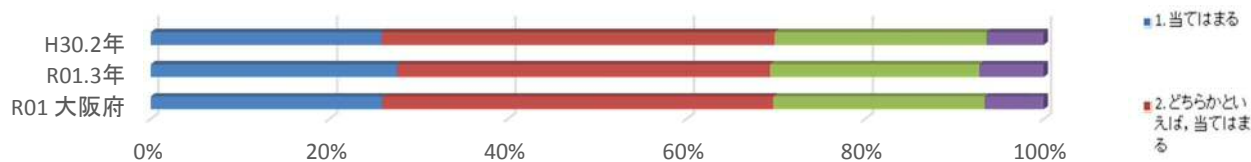
数学の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている。



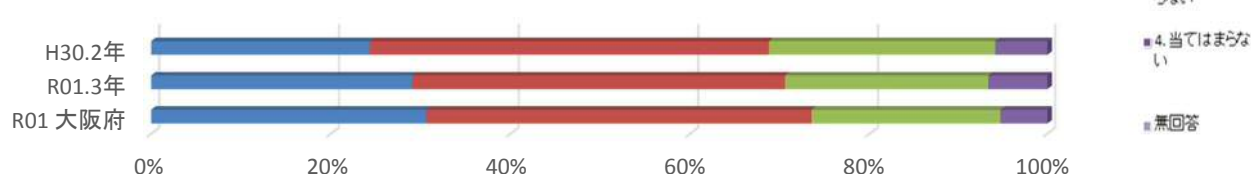
英語の授業で自分の考えを表現するとき、相手に伝わるよう工夫して話したり、書いたりしている。



理科の授業で自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てている。



社会の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている。



■特徴的な傾向と対策

- ・国語・英語・社会の「考えの理由がわかるように気をつけて書く」「自分の考えを表現するとき、相手に伝わるよう工夫して話したり、書いたりする」「自分の考えを話したり書いたりする」は、2年時に比べ肯定的な回答が増加している。数学の「公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」は、1, 2年時に比べて、肯定的な回答が増加しており、大阪府平均と同程度である。また、理科の「自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てている」も、大阪府平均と同程度である。
- ・授業では、言語活動の充実をはかり、子どもが目的意識や根拠をもち自分の考えを書いたり話したりできる力を育成することが求められる。